



Title	<紹介>山崎勝昭著『萩原広道 未公刊著作集Ⅰ』
Author(s)	伊藤, 智弘
Citation	語文. 2020, 114, p. 62-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85453
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

紹介

山崎勝昭著『萩原広道 未公刊著作集Ⅰ』

伊藤 智弘

萩原広道は、従来主に『源氏物語評釈』の著者として知られてきた国学者である。山崎氏の既著『萩原広道』上下巻、『俗地と文人―幕末期大坂の萩原広道―』は、広道についての詳細な伝記的研究を軸とし、それに収まらない広い射程を有する論であった。

本書は、氏の著書にも引かれた萩原広道の著作のうち、未公刊のもの（広道自身が刊行を企てながら果たせなかったものもある）の翻刻本文である。それらは以前にも山崎氏の個人誌『蔑』に掲載されたものを含むが、本書によってその全体を見ることが容易になった。収録されているのは、百人一首注釈書である『百首異見摘評』、古典考証を始め、多岐に亘る内容について書かれた随筆集『玉篠』、大坂を舞台にした雅文笑話集『葦の葉わけ』、外国語の音訳における仮名の有用性を説く『西戎音訳字論』、国学教授用テキストである『本教提綱』、また付録として、岡山在住時代の事を綴った『水蓼』の六作品である。「文人」として身を立てようと志した広道だけあって著作の内容も幅広く、様々な側面を見ることができる。本書の収録作品でも、『百首異見摘評』や『本教提綱』では、学問の継承による発展とそれを支える客観性・公開性を重視する姿勢が、逆に『西戎音訳字論』で「皇国ノ音声言語」を称揚する姿には当時の国学のイデオロギー的側面が顕れ、時代

の中に生きる学者としての広道が見える。

正確には「未公刊」でない著作（『葦の葉わけ』）もあるが、それは既存の活字翻刻における原文表記改変の大きさを鑑み、再度の翻刻を行ったものである。かな主・漢字従で記された該書の表記の読みづらさ（そして、それ故に表記改変に及んだのであろう先行翻刻者の配慮）を認めつつ、その「読みづらい」表記が広道の思想に適ったものであることを、広道自身の記述から裏付けており、翻刻に際して「原文」のみならず「著者の意図」に対して正確であろうとする姿勢が明確である。広道の著書・思想に通曉した著者の知見が活かされると共に、翻刻という作業について一つの範を示したものとも言えるだろう。

各作品には解題や注も付されており、『萩原広道』での説明を簡易化して再掲した部分もあるが、より書誌学的な側面をはじめとして、そちらに見えない記述もある。これらもまた、広道とその周辺事情の様子を窺わせてくれる重要な情報である。双方を相補って利用するのが理想的である。

国学（者）研究の裾野の広さは山崎氏自身の研究によっても示されたところであり、人物同士の交流、彼らの蔵書やその往来、出版事情や時代・社会環境との関係など、様々な視点があり得る。本書、刊行するつもりという『未公刊著作集Ⅱ』は、そうした多様な視点をとるための基礎を提供してくれるものとなるだろう。

（ユニウス、二〇一九年七月、三八八頁、三、五〇〇円＋税）

（いとう・ともひろ 本学大学院博士後期課程）